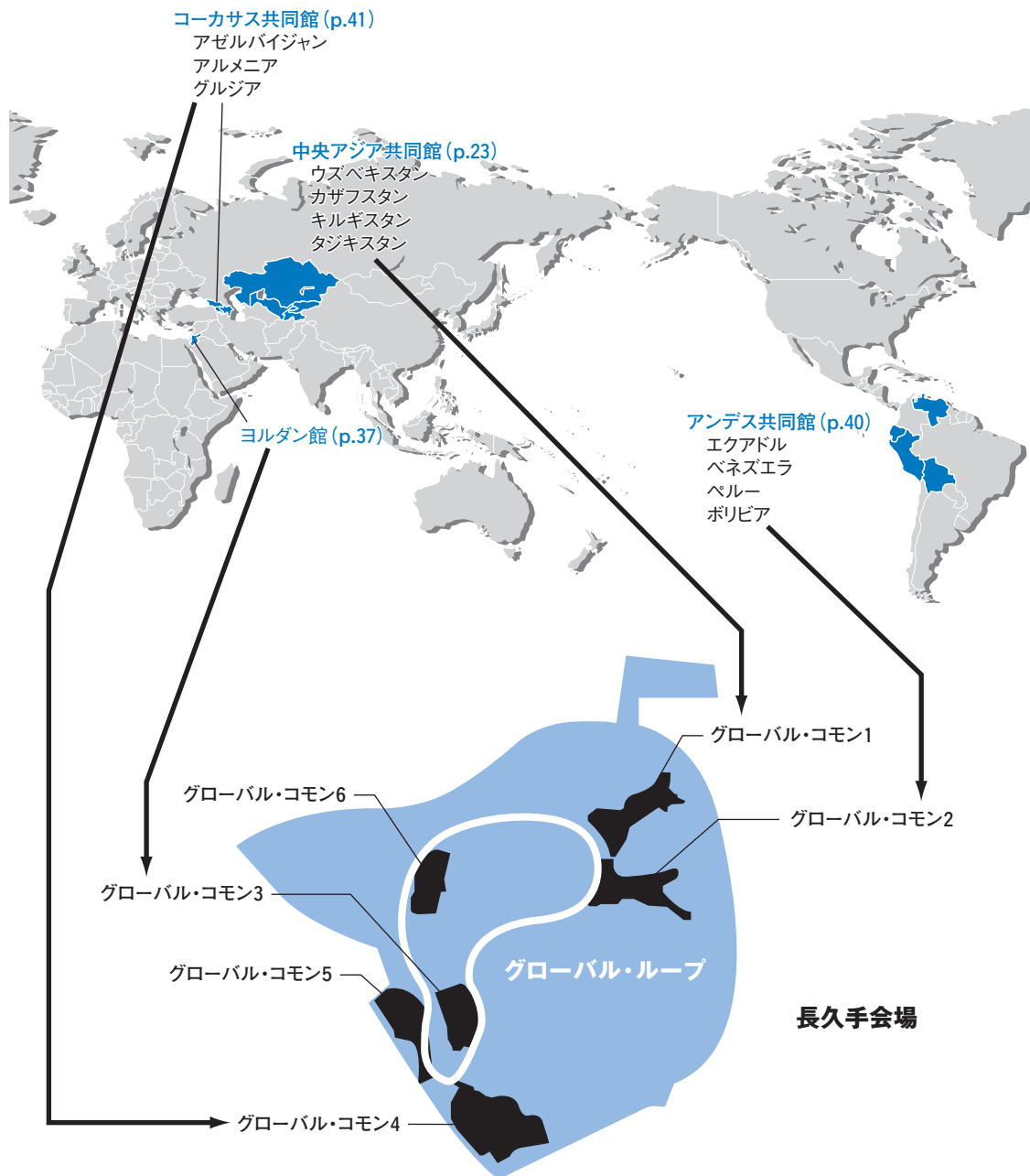


外国パビリオンの出展

現地事情に詳しい商社からの出向者を中心とする、2005年日本国際博覧会協会のリエゾンオフィサーは、約120の国および4国際機関を地域別に担当し、出展を支援している。このようなリエゾンオフィサーの方々から、担当地域のパビリオンの、出展に至るまでの経緯および見どころ等をご紹介いただいた。



ヨルダン館のリエゾンオフィサーとして



宮川 洋一 (みやがわ よういち)
財2005年日本国際博覧会協会
国際・財務本部リエゾンオフィサー
公式参加者支援グループ上席調査役
(豊田通商(株)より出向中)

国際・財務本部 公式参加者支援グループに所属するリエゾンオフィサーは、その所属部署名が示すとおり約120カ国の参加国と、4国際機関（＝公式参加者）の出展参加を全般的に支援するのが主な仕事であり、6人でこれらの国々・機関を地域別に分けて担当している。言わば公式参加者に対する博覧会協会の窓口的な役割と言える。一方リエゾンオフィサー以外の部署は、建設、運営、広報、儀典、催事、宿舎、情報通信、物流、保険、営業出店等、機能別の組織であり、海外の万博出展主体組織へは、地域担当のリエゾンオフィサーという横軸と、それぞれの機能別担当者という縦軸の両軸が一体となって対応している。

万博のことをよく知っている方々から「万博でのリエゾンオフィサーは花形職」とか「最もタフでなければ務まらない仕事」と言われる。前者はあまり感じたことはないが、後者はまさにそれを日々実感している。リエゾンオフィサー6人は総合商社とジェットロからの出向者で、40～50歳代のいずれも海外駐在も含めて海外経験豊富なスタッフがそろっているが、それでも120カ国ともなると、今までのビジネス経験では全く接触したことのない国もかなりある。海

外とコンタクトする窓口役と言えれば聞こえは良いが、実際は日本と出展国間で万博に対する考え方、思想の違いで摩擦や衝突が生じる最前線にいますので、その解決策に常に頭を悩ませる毎日である。世界の外交問題がなかなか簡単には解決しない縮図を肌で体験しているようでもある。

私たちがカバーしなければならない領域も広く、輸送、通関、保険等、比較的商社業務に関係ある分野は対応がしやすいが、儀典やVIP警備等に関わる分野は商社の仕事ではなかなか経験しない分野で対応に苦労している。また外交問題も微妙に絡み、関係省庁と調整しながら慎重に解決しなければならない問題もあり、その一方で「道に迷って宿舎に帰れなくなった外国人を保護しているので迎えに来てほしい」といった交番からの連絡への対応や、「アパートの水道で水漏れがしてどうしよう」といった公式参加者のよろず生活相談もあり、そういう意味での「何でもリエゾンに」といった守備範囲の広さもある。

出展国からの不満の多くは、日本の複雑で多岐にわたる規制と許認可に関わることと、日本の物価の高さについてで、例えば「日本の」溶接工の資格がないと溶接作業ができないということで、海外から来た溶接工が仕事できないと



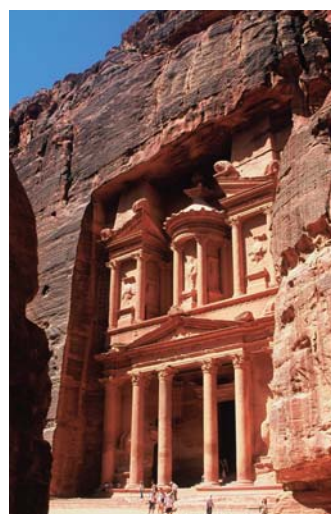
ヨルダン館の出展打ち合わせ

いったようなケースが多々ある。そういった資格もいくつかの外国語で試験を受けて取得できる道があればよいのだろうが、試験もほとんどは日本語だけで、同様に許認可の申請手続きなども日本語のみ受け付け、窓口対応も日本語といった問題をよく指摘される。また物価については、大量生産される物の物価はそれほどでないものの、展示用に作られる一品物の物価は外国人にはかなり高く感じられる。店で買った1万円ぐらいの机でも、決められたサイズで展示用に特注生産すると、やはり5万円ぐらいかかるといった具合である。物価は出展費用、つまり公式参加者側の万博出展の国家予算に直接関わるので、かなりシリアスな問題であり、「日本の物価が高すぎて、すでに国会で承認された予算ではとても足りない」といった声もよく聞かされる。

私はグローバル・コモン3のパビリオンを担当しているが、私自身も万博出展支援のために専門家とともに現地訪問をした、ヨルダンの出展をご紹介したい。この専門家派遣は低中所得国（国民1人当たりGNPが\$746以上\$2,975以下）への日本政府からの財政支援プログラムの一環として陳列館の内外装費、日本人アテンダント雇用、事務局スタッフ派遣費用への支援等と合わせて行なわれた。ヨルダンでは経済的には本来

それほど困っているということはないものの、イラクとの貿易取引の依存率が高かったため、イラク戦争により大きな経済的ダメージを被った。


この派遣訪問では、博覧会協会から出展ルー

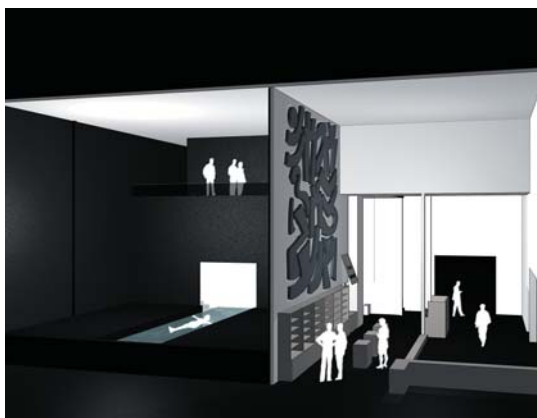


ペトラ遺跡

ルや関連情報を提供する役割の私とともに、パビリオン設計プランニングで実務経験のある専門家も同行し、ヨルダン側の万博出展委員会と面談、同国が作成した計画案に対し、日本における総事業費試算や関連法規や資材相場に照らしての問題点の指摘やアドバイスを与えるといったことが行なわれた。

ヨルダンは王国であり、ヨルダン王室は日本の皇室とも交流があり、非常に親日的な印象を受け、ここからイラクのバグダットまで車で1日で行ける距離とは思えないほどに首都アンマンは平穏に感じられた。

ヨルダン館では来館者に死海のすばらしさ、死海を守るためのヨルダン国の環境に対する取り組みを紹介するというので、死海の水を張ったプールを作り、実際に来館者が死海に浮く感覚を体験できる演出がなされている。また死海の海底からの発掘品を展示し、ヨルダン国の歴史について紹介したり、泥パック・塩等を使ったエステ体験等も予定されている。私自身もヨルダン訪問時には、実際に死海体験をすることができたが、万博会場でも来館者の皆様と同じ体験ができることを楽しみにしている。 



死海の水を張ったプールで浮遊体験（イメージ図）

アンデス共同館



服部利昌(はっとり としまさ)
財2005年日本国際博覧会協会
国際・財務本部リエゾンオフィサー
公式参加者支援グループ上席調査役
(三井物産株より出向中)

グローバル・コモン2は、北／中／南／米大陸の諸国によるパビリオンが、集中している。ここでは、アンデス共同館を紹介する。

NAFTA、SICA（中米統合機構）、CAN（アンデス共同体）、MERCOSULといった言葉で表現される近隣国の集合体という切り口で見れば、アンデス共同館はCANの構成国によって運営されるパビリオンである。CANは、ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアの5カ国であるが、コロンビアが、経済的理由で、早々と不参加を決めた。地理的には、その西側にアンデス山脈を望み、東あるいは南側がアマゾン川流域に接するこの地域の諸国は、その英文共同館名を「Andean Amazonian Pavilion」と命名。経済的には、現下の原油高で意気上がるベネズエラもいれば、豊富な天然資源を有しながらも、港を持たないため、厳しい状況が続いているボリビアもいる。「国としてではなく、地域として」という考え方に沿って参加したものの、各国は、そのアイデンティティをにじみださせようとする思いも強い。本館の展示計画立案には、約1年かかった。リマ、



見えない叡智



入り口部分

カラカス、キトーおよび名古屋で計6回の共同館全体会議が持たれた。コンセプトは合意したが、具体的展示内容は、議論に次ぐ議論だった。「何がこの地域を代表する展示なのか？」参加国の建築家、デザイナーの意見が分かれた。意見の相違は、激しい議論を呼び、共同館構想が崩壊するのではないか、との局面もあった。また、展示内容は、協議が進む中、高品質な物になりがちであった。ある時点で、各国の意見が、やっとまとまりかけたが、その展示内容を実現するために必要な資金は、各国の予算をはるかに超えるものであったため、見直しとなった。

意見の相違はあったものの、最終案に到達したのは、参加4カ国の基本的共通認識、すなわち、「国家予算を使うかぎりは、共同館として、なんとしても成功させ、一人でも多くの皆さんに来館してもらいたい」という思いがあったからだと思う。

本館は、最初に「トンネル」がある。これは、館の外と内を隔絶するための導入部分。次にアマゾン森林（低地部分）からアンデス山頂（高地部分）まで、高度に応じて自然の変化を惹起させる展示技法が楽しめる。さらに、「自然なもの」と「作られたもの」との対比による、この地域の「自然の叡智」を表現する。

本館のメインは、アビスモ（深淵）。180度の立体大型スクリーンに、アンデス・アマゾン地域の自然の偉大さを音響と共に映し出す。観客は2階部分の上から、その偉大な光景を目の当たりに見ることができ、深淵に引き込まれていくような感覚を体験する。暑い名古屋での開催を意識した工夫もある。

多くの人の来館を期待する。

コーカサス共同館に取り組んで



澤山明宏 (さわやま あきひろ)
財2005年日本国際博覧会協会
国際・財務本部リエゾンオフィサー
公式参加者支援グループ上席調査役
(三菱商事(株)より出向中)

某テレビのクイズ番組でコーカサス地方が一瞬クローズアップされたことがある。アゼルバイジャン、アルメニア、グルジア。司会者は「どんな国ですかねえ」と首を傾げていたが、これが日本人一般のコーカサスへの反応だろう。日本に大使館を設置していないこれら3カ国が2003年半ばまでに愛知万博への参加を申し入れてきていた。

アゼルバイジャンとアルメニアは90年代前半に激しい領土紛争を戦っている。「こんな国同士を共同館に参加させるとは」と笑う声も聞きながら、2004年1月、アゼルバイジャンの首都バクーに一人入る。派遣元の三菱商事 斎藤裕和バクー事務所長の支援あってできたことだ。さらに同社業務部のロシア・CISの専門家、遠藤寿一氏にもこの地域の政情などについて意見を何度かうかがっている。

初日の会見でシャリホフ副首相は「アルメニアと交渉はできない」と釘を刺してきた。「交渉相手は日本である」「なぜ共同館で参加しな



コーカサス山脈

ければならないのか?」「アゼルバイジャン、グルジアと言っても日本人にはなじみがない。コーカサスというくくりで紹介したい。欧州の一部として位置付ける」。

ようやく「やってみよう」という姿勢をアゼルバイジャンが示してくれた。これを機にこの年の8月まで、3回にわたり、ミッションを率いて3カ国を訪れ、展示計画策定のための交渉を重ねた。斎藤事務所長がロジスティクス準備、さらにはグルジアのトビリシでもロシア語通訳を買って出てくれた。

夏。バクーでの最後の会談。「われわれの事情でこのプロジェクトをつぶすことはない」アゼルバイジャンの政府高官が言ってくれた。晩秋には3カ国の関係者が名古屋で一同に会するに至る。アゼルバイジャンは同国の豊富に恵まれた天然資源であるカスピ海の石油、アルメニアはノアの箱舟が漂着した伝説で名高いアララト山の下ではぐくまれた独自の石材建築、グルジアは「100万本のバラ」の歌のモチーフのニコ・ピロスマニの絵画を紹介する。これで各国の展示内容が決まった。

日本の万博参加に何を期待するか。3カ国ともに漠然ながら強い期待を持っているだろう。今日まで日本とは目立った関係のない国々である。アゼルバイジャンとアルメニアの関係者は日本でも握手はおろか視線を交わそうともしなかった。コーカサスという言葉、地域にどれだけの日本人が関心を持ってくれるだろうか。いろいろな不安があるが、とにかく商社の仲間が損得抜きで協力してくれて、コーカサスのささやかなお披露目が準備できた。グローバル・コモン4に展示される。少なからぬ日本人の間に未知の国への新しいロマンが育ってほしいものである。



アララト山のふもとに広がる街並み

JF
TC